

学術機関リポジトリ成果報告書

平成18年4月26日

山口大学の取り組みの経緯

平成16年度、機関リポジトリ構築の経費を確保するため、「教育研究支援経費に係る戦略経費」として、学内に予算要求を行った。平成17年度、本格的なリポジトリ構築のため図書館職員による準備会（RPP）を立ち上げた。同年リポジトリ構築のための学内予算が措置され、システム構築に向けた具体的検討を開始した。同年10月にNIIのCSI構築推進委託事業に参加を機に、以前設置していた準備会を発展的解消し、新たにCSIプロジェクトを学術情報部長（現情報環境部長）直属のプロジェクトとして立ち上げた。プロジェクトは、図書館職員で構成し、総括班2名、入力班5名、システム班2名、渉外班（総括班を含む）の計9名で組織し、必要に応じて目録担当係等の職員を加えて、協議検討を開始した。平成18年1月、サンプルデータをデータベースに搭載し、学内に試験公開を開始した。同年3月機関リポジトリの正式な名称と愛称及びロゴ・シンボルマークを学術情報機構内に公募して決定し、同年4月3日に公開用ホームページを開設し、公開とした。

正式名：山口大学学術機関リポジトリ

愛称：YUNOCA

Yamaguchi University Navigator for Open access Collection and Archives

シンボルマーク：きつね

学内合意

当初、図書館職員による準備会を立ち上げた時は、機関リポジトリの構築は図書館の一提案としての位置づけでしかなく、関係係から数名が集まり構築に向けた協議を行った。協議は、システムそのものの構築より、学内合意に向けた運用に関するガイドラインや運用方法の検討が先行し、とりあえず素案を策定した。

委員会への合意は、平成17年5月25日の図書館専門委員会において、新図書館システム（平成17年4月リプレース）の新サービスの一環として機関リポジトリを紹介し、組織体制づくりの理解と協力依頼を行った。平成17年7月20日の図書館専門委員会において、機関リポジトリシステムの全学的周知体制の必要性について報告し了承された。これにより機関リポジトリが図書館事業として合意されたと考える。一方、館長（副学長）から幹事会（上部委員会）へ報告され、了承を得た。

構築作業

C S I プロジェクトは、データベースやサーバ等のシステム導入とデータ入力について協議検討を行った。データベースは、当初導入経費の関係で、**D-Space** を視野に入れていたが、今後システムの維持管理をするための人的要員の確保が困難になることが予想されることもあり、**InfoCOM** 社製の **InfoLib-DBR** を導入することにした。また、搭載するデータについて、ポストプリント等の学术论文を収集するためには、学部へのプレゼン等による営業活動が必要であり、かつ機関リポジトリの理解を得るためには、目に見えるものを用意する必要があると判断し、平成17年度は、既に電子化している「山口大学工学部学報」及び「山口大学工学部研究報告」と電子化を決定している「**Bulletin of Yamaguchi Medical School**」を先行して搭載することにし、それぞれ紀要編集学部から利用許諾をとった。また、NII から CiNii に記録されている紀要類のデータ提供を受け、搭載作業量の軽減を図った。

メタデータの inputs は、館内の職員の協力と学生との協同作業により行い、一次データの電子化は、業者に外注し冊子から **PDF** を作成した。3月末現在約4,400件のメタデータと約3,200件の一次情報を構築した。

今後の課題

現在までの作業は、比較的電子化しやすい大学紀要をターゲットにして進めたが、ポストプリント等の収集を行うためには、各教員の理解と収集体制の確立が欠かせない。そして、**YUNOCA** を大学の学術情報発信システムとして機能をさせ、学内の位置づけを確立するためには、全学組織への発足に努めるとともに、ガイドラインの策定及び投稿手順等の制定を行う必要がある。

平成18年度は、山口大学の学術成果物である大学紀要の収集を拡大するとともに、ポストプリント等の投稿論文の収集を容易に行うため、学内教職員への広報活動を積極的に行う。併せて、これからの電子出版化のモデルを検討し、研究者自身の **PDF** 化による電子出版の支援を行う予定である。また、**InfoLib-DBR** にメタデータのハーベスト機能を追加し、NII のハーベスティングに対応する予定である。

YUNOCA は学术论文だけではなく将来的には地域連携の一つとして、地域の特色ある資料を収集し山口学 **DB** としての発信を考えている。